1973
作品ナンバー0115

The Art and Meaning of Ikebana

記録
35ミリ
カラー／27分
英・仏・独・葡・西・露・アラビア語版

■企画
外務省

スタッフ
■製作
村山英治
■脚本・演出
村山正実
■撮影
村山和雄
■照明
谷川庄三
澤田　実
■編集
沼崎梅子
■音楽
別宮貞雄

■出演
草月流：
勅使河原蒼風
勅使河原　霞
小原流：　小原豊雲

〔生花の美〕
1973年オルベットー国際伝統工芸映画祭マウリッツィオ賞（イタリア）

日本のいけ花を文化史的に描いて、人と自然が融合する自然観や、美しいものを身近におく生活習慣、ひいては日本人の普遍的な美意識について語る。

花にはそれぞれの生い立ちがあり、自然の面白さがある。自然の中で、枝ぶりを選び、花を選ぶ時、いけ花はすでに始まっている。手折った花を素材にして、思索に満ちた美の世界を構築することに思い至ったのは、日本人をおいて他にない。ここには自然の美とは異なった、自然を理想化し凝縮したいけ花の世界がある。日本におけるいけ花の生い立ちは古い。豊作を祈る祭りの花神輿や花傘は、実りをもたらす花には豊作の神が宿ると考えられていたためである。6世紀の初めに伝えられた仏教では、仏の供養に花が供えられ、日本の古代からの花への信仰と極楽浄土の思想とが混じりあった。14世紀頃から、花は宗教的な意味から次第に人が見て楽しむものに変わってきた。

15世紀には、いけ花の古い形である立花（りっか）が生まれた。16、17世紀には建築様式の変化に伴って大きな床の間が生まれ、立花も大きくなり、出陣、結婚等晴れの行事に立てられた。立花は仏教的宇宙の秩序を表す7つの役枝（役名をもつ枝）で構成された。17世紀頃から立花は、貴族から武士階級へと広まり簡素化された。その立花と、茶席の飾り花の投げ入れ花の中間をとったのが、いけ花である。

18世紀から19世紀にわたって大いに流行したいけ花は、立花の7つの役枝を3つ（天・地・人）にし、全体の姿を三角形にまとめた。この誰でもが覚えられる花型を生んだことで、いけ花は広く大衆に普及していった。やがて19世紀末には西洋文明の影響をうけて盛花も現れ、自由な現代いけ花が生まれる魁（さきがけ）になった。